

## (44) 福 山 藩 の 砂 留

広島県土木部 下 江 勉  
○恵 柳 信 政

福山には、藩政時代の砂防工事があるという言い伝えがあり、土地の人は砂どめという。この砂どめが、いつ、どのように築造されたのか明らかにしたい。

### 1. 砂 留 の 記 録

旧安那郡西中条村誌（明治15年金尾直樹）、湯野村誌（明治18年得能正通）によると、元文3年（1738）の深水古砂留をはじめ、安政元年（1854）の深水砂留等24箇所の砂留の記録があり、備陽六郡志（宮原直 1702～1776）には、旧福山藩市村の綱木砂留の記録がある。このほか安永2年（1773）下御領村普請場所付帖にとうとう砂留3箇所、天保3年（1832）とうとう3番砂留普請、天保6年（1835）とうとう大砂留普請等の記録がある。

### 2. 砂留の位置と形状寸法

この記録に基づいて、昭和52年1月現地調査と測量を実施した結果、すべての砂留の位置と形状寸法を確認した。

深水砂留	落差H=6.3m	圭崎古砂留	H=7.0	3番砂留	H=6.1	淀ヶ池砂留	4箇所
深水古砂留	H=11.0	貝谷砂留	H=6.1	4番砂留	H=3.4	大原池砂留	4箇所
弥谷砂留	H=7.2	貝谷下砂留	H=4.7	5番砂留	H=8.8		
山田砂留	H=7.8	堂々川1番砂留	H=3.2	6番砂留	H=13.3	市村綱木砂留	1箇所
圭峰砂留	H=6.5	2番砂留	H=3.9	支所	2箇所		

構造についてみると、元文3年（1738）の深水古砂留は、アースダムであり砂留の原型を想わせる。天保3年（1832）普請の3番砂留は、よろい積ふうのロックフィルタイプで、おくれて安政元年（1854）ごろ普請の深水砂留は、築城石垣ふうの水通し断面を設けた石堰堤である。砂留の構造は時代によって、施工技法に特徴があり、これが複合した構造である。

### 3. 福 山 藩 の 普 請

1619年の福山城の石垣造成と建築をはじめ、干拓、芦田川改修、溜池工事等があるが、福山藩御普請中出勤郡方御組に属していた藩士小田茂八が、1824年頃土木普請や土木材料について書きつづっている古文書「増補御普請手控」（服部政貴氏蔵）の55頁には、亮和3年（1803）「石築井手伝の」のなかに砂留石垣の歩掛を記帖しているゆえ、砂留工事も河川や溜池と同じく、藩の仕事として位置づけられていたものと解される。福山藩では延宝元年（1673）大洪水があり、堂々川では死者63人と国分寺や民家多数が流失する災害があった。この頃から人命と財産を守るために、砂留工事をはじめ、福山藩の普請の一つとして、1800年頃多くの砂留が築造されたものと見なされる。

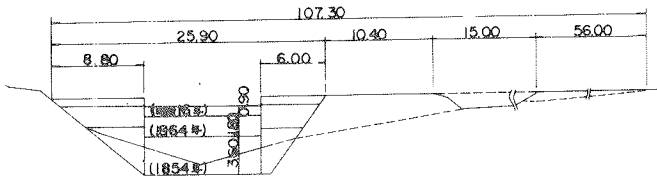
### 4. 江戸時代の砂留の意義

この地域は、明治35年から大正14年まで約25年間、国庫補助山腹砂防工事を実施したため、山地は安定し土砂の流出は少ない。砂留工事という江戸時代の溪流砂防工事が、明治時代の山腹砂防工事と一定行為の禁止制限と相まって、砂防法の目的を完遂した意義は大きい。それにしても現代と同一規模の砂防ダムが、江戸時代に施行されていた事実は、驚異なことである。

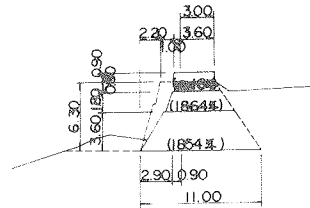
（現地の説明はスライドによる）

# 深水砂留

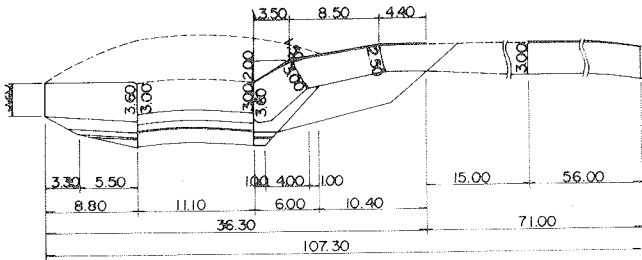
正面圖



側面圖



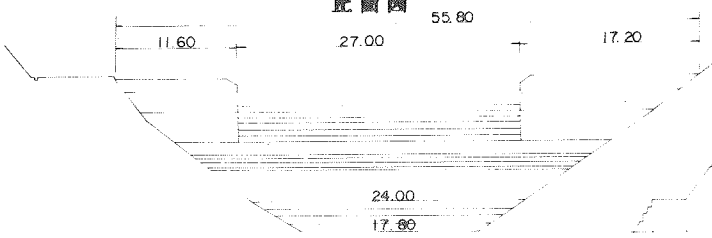
平面圖



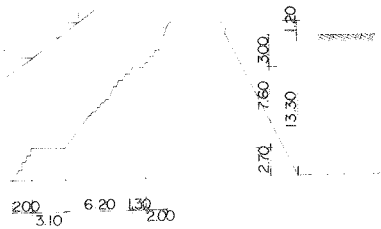
# 六番砂留

堰堤構造圖

正面圖



側面圖



平面圖

